

〔畜 産〕

豚の人工授精に関する実態調査

第2報 経営規模別にみた繁殖豚農家の意識について

藤島直樹・坂井 巧・大和碩哉・増満洲市郎・酒見允治
(福岡県種畜場)

FUJISHIMA, N., SAKAI, T., YAMATO, H.,
MASUMITSU, S. and SAKEMI, M.

Research on Artificial Insemination of Swine
On the Conscious Survey of Farms Kept Breeding Swine
by Different Operating Scales (2)

豚の人工授精については、現在のところ牛に比較して、その普及が非常におくれている。しかし、優良種雄豚の高度利用による改良の促進、計画的雑種生産、および家畜防疫、衛生学的観点からその必要性が認められている。

従ってその普及阻害要因を摘出し、今後の普及方法、および技術改善の方向をみいだすために、豚の人工授精に関する実態調査を実施しているが、前年度人工授精の普及が比較的進んでいる地域とそうでない地域について、繁殖雌豚農家の人工授精に対する意識を中心として調査をおこなった。しかし、規模が拡大するにつれ、それら多頭数飼育農家の人工授精利用についての考え方が消極的になるのではないかという考えがあるため、今回は経営規模別に繁殖豚農家の人工授精に対する意識を調査したので、その結果を報告する。

1. 調査方法

1) 調査地域および対象農家

調査地域は福岡県筑後地域を中心に140戸の繁殖雌豚飼育農家を対象として、19の項目についてアンケート調査を実施した。

2) 調査期間

昭和48年12月～昭和49年2月

2. 調査成績

1) 調査農家の経営実態

調査農家の経営規模を種豚(種雄豚, 種雌豚, およびそれらの候補豚とする。子豚および肉豚は除外する)の繁殖頭数でみると、図1のとおりである。依然として少頭数農家が多く、多頭数農家では20~30頭の規模に山がある。なお、平均繁殖頭数は10.8頭である。

表1は昭和48年度における種付状況を示したものであるが、自然交配だけ実施したもの82.9%, 人工授精だけ実施したもの15.7%, 両者併用1.4%であった。規模別

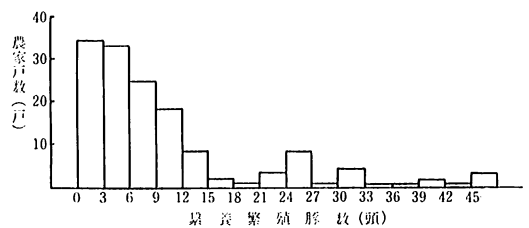


図1 調査農家の経営規模

表1 調査農家における種付の状況

区 分	10頭以上 飼育農家		10頭未満 飼育農家		計	
	戸数	%	戸数	%	戸数	%
自然交配	43	87.0	73	80.2	116	82.9
内訳 { 自家 委託 併用	25		1		26	
	13		72		85	
	5		—		5	
人工授精	6	12.2	16	17.6	22	15.7
内訳 { 自家 委託	—		—		—	
	6		16		22	
両者併用	—	0	2	2.2	2	1.4
内訳 { 自家 委託	—		—		—	
	—		2		2	
計	49	100	91	100	140	100

にみると、多頭数農家は少頭数農家に比較して自然交配が多く、内訳をみると自家種付が多かった。

経営者が現在繁殖豚経営の主眼点をどの点においているかを示したのが、図2である。もっとも多くの農家が飼料費の低減、次にふん尿処理をあげ、改良繁殖については6戸の農家があげたにすぎない。もちろん、調査時点における飼料費の高騰、またふん尿処理問題などが農家の頭を悩ましていることから当然の結果であろう。

2) 農家の改良に対する考え方

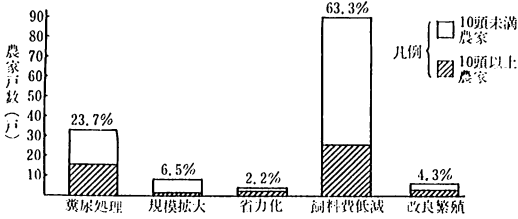


図 2 繁殖豚農家における経営の主眼点

農家が生産する子豚の体型、資質の向上、斉一化、および肉質改善についてどのように考えているかを調査した結果、農家の79.9%が関心をもっている、20.1%が問題外であると回答している。

規模別には多頭数農家は関心をもって努力と答えたものが64.6%に達し、少頭数農家の38.5%に比べると、かなり子豚改良への関心が高いと考えられる。

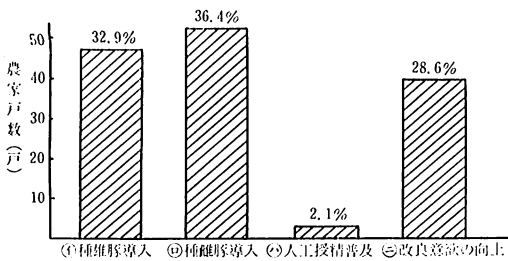


図 3 改良上もっとも有効な手段

次に農家が改良上もっとも有効な手段と考えているものについて調査した結果は、図3のとおりである。

優良種豚の導入(イ.ロ)が多く69.3%を占め、人工授精の普及と回答したものはわずか2.1%であり、人工授精の意義についての理解が足りないと考えられる。

3) 繁殖豚の種付について

農家が繁殖豚の種付に要する手間をどのように考えているかについては、手間がかかって省力化したい16.7%、手間がかかるがやむをえない31.2%、たいした手間でない39.1%、問題外である13.0%であった。どちらかといえば手間がかかると考えているもの、そうでないものが約半数づつとなったが、規模別にみても同様な結果となった。

次に農家の発情および種付適期の判定技術についての結果は、発情と種付適期を的確に判定できるもの11.5%、発情は判定できるが適期はおおよそ判定33.1%、発情判定のみおおよそ46.0%、発情判定できず9.4%であった。全体の44.6%は発情と種付の適期を或る程度判定できるが、残り55.4%は発情だけおおよそ判定できるか、またはできないものであった。人工授精を普及させるために

は、これら技術の未熟な農家への教育が必要と考えられる。

4) 人工授精に対する農家の考え方

人工授精の経験についての回答は、経験なし65.5%、経験はあるが現在実施していない13.0%、現在若干実施している4.3%、大いに実施している17.3%であった。人工授精の経験のないものが65.5%いることから、これら農家に対する技術上の指導が必要である。

また人工授精の手間については、面倒というよりむしろ省力的だと考えているものが59.7%いるが、規模別には10頭未満の農家が省力的だと考えているものが多くみうけられた。これを人工授精の経験の有無に分けて比較してみると、表2のとおりとなる。

表 2 人工授精の経験とその手間に対する考え方

区 分	経 験		未 経 験		計	
	農家戸数	%	農家戸数	%	農家戸数	%
①人工授精は大そう面倒だ	2	4.1	6	6.6	8	5.8
②若干面倒だ	11	22.9	37	40.7	48	34.5
③面倒でないが自然交配がよい	12	25.0	30	33.0	42	30.2
④省力的だ	23	47.9	18	19.8	41	29.5
計	48	100	91	100	139	100

経験者の73%(ハ.ニ)は面倒でなく省力的だと考えているが、未経験者は53%であった。特に未経験者は省力的だと考えているものが20%(ハ.ニ)と経験者に比較して少なかった。

人工授精の普及阻害要因のなかでも大きな要因のひとつであると考えられる人工授精の繁殖成績についてみると、人工授精の受胎率については、変らないと答えたものが74.1%と多いが、低下すると答えたものが20.1%であった。

人工授精の産子数については、変らない68.4%であったが、増加すると答えたものに比較して、むしろ低下すると答えたものが6倍の数値を示した。人工授精の繁殖成績については、受胎率、産子数が低下するのではないかという不安感をもつものがかなりいることが考えられる。

今後人工授精を実施していく意志のあるものが80%以上あり、特に規模の大きい農家ではその意志が強く、改良意欲も高かったことから、人工授精の受入れについて積極的であることが判明した。

3. 総 括

以上の各項を総括すると経営規模に関係なく人工授精

の啓蒙不足，繁殖成績不良，利点が少ない，資金がかかる，あるいは人工授精師の技術が未熟であると考えている農家が多く，特に人工授精における繁殖成績に不安感をもっているものがあつた。

しかし規模が拡大しても人工授精の実施に積極的であり，以上のことより人工授精の普及促進のために次の点

に留意してすすめるべきものと考えられる。

- 1) 繁殖豚農家の繁殖技術の向上を図る。
- 2) 人工授精の技術改善と人工授精師の技術研修を図り，人工授精による繁殖成績の向上をすすめる。
- 3) 人工授精の意義と利点について積極的に啓蒙をおこなう。